

夏のサークル合宿。山奥の電波も届かない不便な場所だったが、私には重大ミッションがあった。密かに片想いをしている三年生の田中先輩との距離を縮めることだ。

(……練習試合のペア、先輩となれますように……！)

ここに来る前からずっとそう祈っていたのに——昼の練習試合でペアになったのは、同学年の一ノ瀬蓮くんだった。端正な顔立ちに穏やかな微笑みを絶やさないが、どこか壁を感じさせるタイプだ。

(……いつもニコニコしてるのに、目が全然笑ってないのよね)

去年の飲み会で、輪の外から冷めた目で周囲を見る彼を目撃して以来、私は彼を苦手だと思っていた。

けれど、ペアになった以上はあまり苦手意識を全面に出すわけにはいかない。

「一ノ瀬くん、ナイスサーブ！」

「……ありがとう」

コート上で完璧なサーブを決める彼に声をかけると、煌びやかな笑顔が返ってきた。だがその瞳の奥に宿る奇妙な光に、やっぱり違和感を覚えた。

（うーん……やっぱ苦手だ……）

そんなすぐには意識は変えられそうになかった。

夜の盛り上がる飲み会を途中で抜け出し、私は一人で大広間にいた。田中先輩に彼女ができたことを知り、静かに片想いに終止符を打ってしまったというわけだ。部屋の隅に座り込み、やけくそに缶チューハイを煽っていると、不意に隣へ誰かが腰を下ろした。

「田中先輩のこと、残念だったね」

見上げるとそこには蓮くんがいた。誰にも言っていないはずの好意を言い当てられ、心臓が跳ねる。

「……えっ。な、なんで知ってるの？ 私、そんなに分かりやすかった？」

慌てて問い返すと、蓮くんはふっと口角を上げた。

「どうだろうね。でも、俺にはバレバレだったよ」

（……なにそれ……）

穏やかな微笑みを浮かべているが、その目は全く笑っていない。急に居心地が悪くなり、私は缶を取り、逃げるように立ち上がった。

「はは。失恋の傷癒さなきゃだし、今日はもう寝るね」

「うん……おやすみ」

大広間の雑魚寝は、女子と男子で左右に分かれての配置だった。私の布団はちょうど真ん中らへんに敷いてあった。

そのまま横になると、心地よい疲労感と共に急激な眠気が襲ってきた。回ってきた酔いも手伝って、私は意識を失うように深い眠りに落ちた。

——何か、変な感覚がする。

下半身がぞわぞわして……くすぐったいような……じんとするような……未知の感覚。

最初は、夢かな、と思った。でも、すぐに違うとわかった。

意識がだんだんはつきりしてきて、私ははつきりと気付いてしまった。誰かが——触ってる。

布団の中で、私の太ももを、ゆっくりと撫でているのだ。

「……っ!？」

心臓が跳ねた。

（誰。な、何。え？ち、痴漢？）

パニックになりそうなのを必死で抑えて、薄目を開けた。部屋の中は真っ暗だった。周りには酔い潰れたサークルのメンバーが寝ていて、あちこちから規則正しい寝息が聞こえる。

手は——隣から伸びてきていた。

（……え……蓮くん？）

暗くてよくは見えないけど、この明らかにイケメンですなシルエットは間違いない。

頭が真っ白になった。あの蓮くんが、こんなことをしてくるなんて。

もしかしたら寝ぼけているのかもしれない。声を出さなきゃ。手を振り払わなきゃ。

そう頭では強く思うのに、身体が石のようにカチコチになって動けない。

そうこうしているうちに、蓮くんの大きな手が、短パンの裾から中に入ってきた。

素肌に直接、指が触れる。太ももの内側を、ツーツと、ゆつくりと這い上がってくる。

ムニユツ♡

（う、うそ……やだ……っ♡太もも、揉まれてる……？）
くすぐりたい。でも、それだけじゃない感覚がある。

「……っ♡」

ついに、下着の縁に、指先が触れる。ゴムの部分をくいと引っ張られる。

（やめて……やめてよ……！）

周りには人がいる。声を出したら大事になる。みんな起きてしまう。でも、このままじゃ――

下着をずらされ、直接、指が私の大事なところに触れる。

クチュ……♡

「……っ」

声が漏れそうになって、慌てて口を押さえた。

指が、ゆっくり動いている。なぞるように、そつと上下に。

クチュ……クチュ……♡

（ひっ♡お、音……っ♡な、なんでえ……？わ、私、濡れてる…

…？やだ……音、周りに聞こえちゃう……）

ダメだと思うのに、身体が、蓮くんの愛撫に反応してしまっている。触られているところが、じんじんと熱くなっていく。

（なんでえ……!?♡こんな状況で……しかも、相手は……苦手な蓮くんなのに……!?♡）

探るように蠢いていた指が、そこを見つけた。

キュッ♡

「っ……！♡」

クリトリスを軽くつねられてびくつと身体が跳ねた。声を出さないように、必死で唇を噛む。

蓮くんは、くるくると指の腹で円を描くように、先端部分を弄んでいる。

「ん……っ♡んん……っ♡」

（やだやだ♡これ以上そこ触られたら……♡）

口を閉じて必死に堪えてるのに、鼻から声が漏れる。

ふと、視線を感じた。薄目を開けると、蓮くんがこちらをじっと見つめていた。

（え……）

——笑っている。

いつもの穏やかな笑顔。でも、その目はいつもとは違う。暗闇の中でも分かるくらい、静かに、ガラガラと燃えてる。

(……寝ぼけて……ない……？ 蓮くん……？)

昼間の穏やかな彼とは別人だった。私と目がバッチリ合っても、その手は止まるどころか、むしろ興奮したように指の動きが激しくなっていく。

「……っ!?♡」

薄い下着越しに、熱を持った指先が私のクリトリスを執拗にこねくり回す。親指と人差し指で小さな突起を挟み込み、円を描くようにじつくりと、それでいて時折ピンツと弾かれると、堪らなかった。

「んっ……♡ お……っ♡」

漏れそうになる声を必死に堪えようとするが、どうやっても声が漏れ出てしまう。大広間にはまだ他のメンバーが寝ていて、呼吸音すら響き

そんなほど静まり返っている。ここで声を上げれば全部バレてしまう。

指先が捉えた快感の芯を、蓮くんは正確に、残酷なまでに丁寧に刺激し続けた。時折ギュッと強く圧迫されると、腰が跳ねそうになる。

グチュ……グチュグチュ……♡

密着した指と生地が擦れ合い、卑猥な音が鳴り響いた。もう隠し切れなくらいに、私のそこはしっかりと濡れてきている。その熱量と粘り気は、触れている蓮くんにも伝わっているはずだ。

（やだやだ恥ずかしい……！　こんな、痴漢みたいなことされてるのに……！）

頭では拒絶しているのに、身体は正直に反応してしまふ。執拗に弄られた先端から快感の波がじわじわと押し寄せてくる。

「——ずっと見てたんだ……君のこと」

ふいに、耳元で、低い声が聞こえた。

(……え……なに……ずっと見てたって……？私のこと……？)
苦手な相手にそんなことを言われて混乱する。

(……ほとんどまともに喋ったこともないのに……)

「ふふ。まさかって顔してるね。俺のこと苦手なんですよ？」

「……あ……」

「どう？ 苦手な男の手で気持ちよくされる気分は？」

「な、何言って……」

グプッ♡

「っ——！♡」

指が、中に入ってきた。

一気に第一関節まで。ゆっくりと、押し広げるように。

ヌプ……ヌププ……♡

「んんっ……！♡ゆ、指……抜いてよお……♡」

「抜くわけないでしょ」

口を手で塞いで、必死で耐える。けれど、中で指が動いたたびに、身体がビクビク震えてしまう。

「きついなあ……もしかして処女？」

「……え」

「違うの？」

「は、はじめてだよ……！」

初めてに決まっている。これまで恋人がいたことさえないのだから。
「あー……興奮してきた。処女まんこなのにこんな濡れてるの？やあらし」

「ちが……っ♡」

「何が違うの？」

グチュ……♡グチュ……♡♡

言い返せない。だって、本当に、自分でもビックリするくらいに濡れてるから。嫌なはずなのに、身体が蓮くんの指をギュッギュッと締め付けてしまっている。

「気持ちいいとこ全部俺に教えて。君のこと、全部知りたいんだ」
指の腹で、中の柔らかい壁をグリッと擦られた。

「っ……………!♡」

身体がびくつと跳ねた。

（そこ……………♡ちよつと指で押されただけなのに……………!?!♡♡）

「……………ここでしょ？ちよつとザラザラしてるところ」

蓮くんの声が、静かに、けれど、とっても満足そうに響いた。それからは、同じ場所を、何度も何度も繰り返し擦られた。

グリグリ……………♡グリグリ……………♡

「ん、ん、んう……………っ♡」

弱いところを擦られるたびに、お腹の奥がきゅうきゅう締まる。

「田中先輩のこと見てる時、ずっと目がトロンってなってたね」

（……な、なに……急に……？）

グチュグチュ♡グリグリ♡

「んんっ……♡やっ……♡」

「でも、今は、俺の指でトロトロになってる……ほら、なか……わかる？君のお汁がいっぱい溢れてきてるの……かわいいね」

そう言う声はどこか狂気じみっていて、思わず背筋が凍る。

（……怖い……のに……身体が……もっともっと欲しがって……震えてる……！♡）

「あ……声、我慢してんのも、最っ高に興奮するなあ」

耳元で囁かれた熱い吐息。同時に、秘所に触れていた指が二本に増えた。

ズププッ♡♡

「ひっ……！♡♡」

不意に突き立てられた異物感に、堪えていた声が漏れる。慌てて口を押さえ直すが、もう限界に近い。

二本の指が、狭い中を強引にかき回し始めた。内壁のひだの一つひとつを抉るように激しくかき混ぜられ、快感がどろりと脳に突き刺さる。

グチュグチュ♡♡ ヌチュヌチュ♡♡

「あ……♡♡ んうっ……♡♡ はあ……っ♡♡」

（二本の指で……♡♡ なかぐちゃぐちゃにされて……♡♡）

激しく中を掻き回されると同時に、親指の腹が再びクリトリスを捉えた。

グリッ♡♡

「っ——！♡♡」

上下から挟み撃ちにされた快感に、視界が真っ白になる。

「同時にされると気持ちいいね？ ほら、トロォ……ってまたやらしいお汁が垂れてきたよ」

指を動かすたびに、ねっとり絡みつく愛液の音が大広間の静寂に響き渡る。恥ずかしさと快感で身悶えする私を見て、蓮くんはさらに深く、執拗に指を突き入れた。

ズチュズチュ♡♡クリクリ♡♡

「やつ……♡♡これ以上は……っ♡♡声、でちゃうからあ……♡♡」

「しー。ほら、他のサークルのメンバー起きちゃうよ？ がんばれ、がんばれ」

耳元に届く蓮くんの声は、どこまでも穏やかで甘い。けれど、私の秘部へ潜り込ませた指の動きには一切の容赦がない。熱を持った肉壁を無

理やり押し広げ、最奥までほじくるようにかき回される。さらに、蓮くんは、先ほどの愛撫で敏感になったクリトリスを親指と人差し指でぎゅううう……と強くつねり上げた。

「……………っっっ♡♡」

（やだ……♡♡気持ちいい……♡♡こんな、眠ってる人たちのすぐ横で……♡♡）

静まり返った合宿所の畳の上。寝息を立てる仲間たちがすぐそこにいるという背徳感が、脳を痺れさせ、快感を何倍にも膨らませていく。お腹の奥がキュウと熱く締まっていき、どろどろに溶け出した愛液が指の動きに合わせて卑猥な音を奏で始める。

クチュクチュクチュクチュクチュク……♡♡

（やば……♡♡なんかきちゃう……♡♡）

「イク？こんな雑魚寝部屋で初めてイっちゃやうの？」

「……っ♡♡」

首を横に振った。だめ、このままじゃ耐えられない。絶頂の波が押し寄せた瞬間、きつと、大きな声が出てしまう――

「んー……いじめるのも楽しいけど……仕方ないなあ」

そう囁いたかと思うと、蓮くんは逃げ場を塞ぐように私の唇に深く口づけた。

グチュグチュグチュ♡♡グリグリグリ♡♡

舌が強引に割り込み、口腔内を貪る。鼻にかかった甘い吐息が漏れると同時に、下半身への攻めはさらに速度を増した。指先がクリトリスを弾き、挟り、執拗に責め立てる。

「んっ……！♡♡んんっ……！♡♡」

口内を蹂躪されながらも、快楽の濁流は止まらない。指がヌポッヌポッとはしたない音を立てて中出入りし、一番気持ちいいところを擦り上

げる。

(やっ……♡♡だめ……っ♡♡イっちゃ……っ♡♡みんな寝てるのに……♡♡こんなところで……♡♡)

視界が白く染まり、腰が勝手に跳ね上がる。絶頂まであとほんの数ミリ。

——その瞬間だった。ピタリと急に指の動きが止まった。

「……っ♡♡」

身体がガクンと跳ねる。痙攣するようにピクツ、ピクツと肢体が震えた。

え、と思った。あとわずかでイキそうだった私の身体は、もどかしさと飢餓感に苛まれ、すぐには痙攣が止まらなかった。

「——やっぱり、まだまだあめ♡」

耳元で、低く囁かれた。

「……っ♡♡」

「ここでイカせるつもりだったけど、気が変わっちゃった」

蓮くんの声が、初めて少しだけ乱れた。

「初イキの声、ちゃんと聞きたい。——我慢してる声じゃなくて」
指がゆっくりと抜かれていく。

「あ……っ♡」

急に空っぽになった感覚。なかがヒクヒクと締まって、何もないところを締め付けてる。

（やだ……♡もうちょっとだったのに……♡♡）

——そう思ってしまった自分に、驚いた。

（私……蓮くんはこのままイかせてほしいって思ってる……♡♡）

「外、出よう？」

蓮くんの手を引かれて、私は迷う間もなく布団からそっと抜け出す。

周りは静かに寝息を立てている。誰にも気づかれずに、縁側へ向かった。

蓮くんの手は冷たかった。さっき私の中をかき回していた指が、今は普通に私の手を握っている。

（この手で、私は……）

考えただけで、太ももの間がじくりと疼いた。

外は夏の夜らしい、生ぬるい風が吹いていた。虫の音が響き、月明かりに庭がぼんやりと滲んで見えた。

蓮くんの手を引かれ、建物の影になる庭の端へと連れて来られた。誰にも見えない場所だ。

背後の壁に強く押し付けられ、身動きが取れなくなる。逃げ場のない空間で彼を見上げると、その長身が私の視界を完全に塞いでいた。

月光に照らされた蓮くんの顔は、昼間よりもずっと鋭く、彫刻のように整っている。けれどそこにはいつもの穏やかな笑顔はなく、静かで飢えた目が怪しく光っていた。

「……ねえ……どうして、こんなこと……」

ようやく絞り出した問いに、彼は答えなかった。代わりに私の頬を撫でる。さっきまで私の中にいた指だった。

「——田中先輩に彼女がいるって知った時、少しだけ安心した」

「え……」

「ずっと君のこと見てた——入試の時に助けてもらった時から」

「（……入試の時……？）」

「あ」

「思い出してくれた？」

「……熱出して……ふらふらしてた人……？」

「うん」

そうだ。試験会場の廊下で今にも倒れそうだった男子に、解熱剤を押しつけた記憶がある。まさか同じサークルに入っているとは思ひもなかった。

「……ごめん。気づかなくて」

「知ってる。謝らなくていいよ、俺が勝手に覚えてただけだから」

（ずっと……あんな些細なことを……？）

私の困惑に、蓮くんは寂しそうにふっと笑った。

「君には記憶の片隅にも残らない瑣末なことかもしれないけど、俺にとっては違ったんだ。熱で朦朧としてたのに、君のことはずっと忘れなかった」

「でも……だったら……」

そんな風に想ってくれていたのなら、どうしてこんな無理やりみたいなことをするのか。そう問いかけたかったけど、言葉が続かなかった。私の戸惑いを察したのか、蓮くんの声色がふっと変わる。

「先輩に彼女がいなかったら、合宿中に告白してたでしょ」

「……っ」

「もしそうしてたら、どうなってたかな」

にっこりと笑うその表情が、月明かりの下でひどく歪んで見えた。

「——考えたくないな。自分が何するか分からないから」

ぞくり、と背筋が震える。

（蓮くん……本気で言ってる……？）

「一年半、ずっと我慢してた。君の隣に座りたかったけど、俺が近づいたら逃げるって分かってたから」

「逃げるって……」

「だって——俺のこと苦手なんだなって分かってたし。話しかけると身体をこわばらせるもんね」

否定できなかった。頬から顎へと滑る指先に、抗えない感覚がある。

——恐怖に近かったその震えが、けれどすぐに熱い期待に変わっていく。身体が覚えているみたいに。

「だから遠くから待ってたんだ。今夜、隣の布団だって気づいた時……神様がくれたチャンスだと思ったよ」

「……っ」

「だってそうでしょ？ 田中先輩のことで落ち込んでる日に、君は俺の隣を選んだんだ」

「そ、それは……たまたまで……」

「うん。意図して選んだんじゃないのは分かってる。でも——今、ここ

にいたのは君の意思だよね？」

これも否定できなかった。あんなことをされた後で、拒否するつもりならついて来るはずがない。

「……嬉しい。やっと俺のものにできるんだね」

微笑む瞳には——底知れぬ狂気が宿っていた。

「……私……やっぱり……」

「もう遅いよ」

そのまま唇を塞がれた。

「ん……っ♡」

すぐに舌が入ってきて、れろれろと絡められる。歯列の裏をなぞり、上顎の窪みを突き、奥に逃げた舌を強引に吸い上げる。——逃げ場のないキスだった。

チュプ……♡チュル……♡レロォ……♡

「ん……っ♡んん……っ♡」

口内を余すことなく舐め上げられ、溜まった唾液を啜られるたびに、蓮くんの味で塗り替えられていく。

ジュルルル……ッ♡

「んむっ……♡♡んっ……♡♡」

激しい口付けに息ができない。でも蓮くんは離してくれない。貪るように犯され続け、鼻から吸い込む空気さえも彼の呼吸と重なった。

(怖いのに……でも、なんだろう……気持ちいい……？♡)

蓮くんのキスは、舌の動きひとつひとつが、私の弱いところを知っているみたいに口内を這いまわる。

ジュルルル♡♡♡ヌチュヌチュ♡♡♡

「んっ……♡♡ふ……っ♡♡」

唾液が混ざり合って、口の端から垂れていくのに、拭うことさえでき

ない。やっと唇が離れた時には、銀色の糸が、二人の唇の間で光っていた。

「……キスだけで腰が抜けちゃった？」

「ち、ちが……」

「違わないよ。——俺の太ももにおまんこ擦りつけてるの気づいてない？」

言われて初めて気づいた。膝から力が抜け、崩れ落ちそうになる体を蓮くんが太ももで支えてくれていた。両脚の間から入り込んできた逞しい腿に、無意識のうちに私の方から密着し、熱を求めて擦りつけてしまっていたらしい。

「ほら……おかげでちゃあんと濡れてるね♡」

蓮くんが膝を動かすと、クチュ……と水音が響いた。

（嘘……♡ キスだけでこんな……!?!♡）

「……さっきの続きしうか」

（さっきの続き……♡）

蓮くんが膝をついた。私のショートパンツに手をかける。

「やつ……こ、こんな外で……っ♡」

「誰も来ないよ。みんな酔っ払ってるから。ちゃんと確認済み」

「確認済みって……」

「合宿所の見取り図、事前にチェックしてたんだ。ここは建物の死角だし、宿泊所の窓から見えない」

（事前に……？まさか……最初から計画して……？）

抵抗する間もなく、ショートパンツを下ろされる。下着の縁にも指がかかって、横にずらされた。月明かりの下で、下半身が晒される。生ぬるい夜の空気が、濡れた場所に直接触れて、ひんやりする。自分がどれだけ濡れていたかを思い知らされた。

「や、やだぁ……♡ 見ないで……？♡」

「無理。——さっきは暗くてよく見えなかったから」

蓮くんの目が、私の露わになった場所をじっと見つめている。観察するみたい、下から覗き込まれて、羞恥に顔が赤くなる。

（そんな場所……自分でもちゃんと見たことないのに……）

「……すごい濡れてる。ほら、またトロオって糸引いてるよ。やらしいね。もしかして……布団の中からずっと濡れたまんま？」

「……っ」

「恥ずかしい？でもこれ、俺の指でこうなったんだよ」

（やだ……♡ わざわざ言わないで……♡）

「——もう、声我慢しなくていいよ」

ぬるりと湿った何かが、直接敏感なところに触れた。

「ひっ……♡」